

コマクサ

雪消えし のちに蔵王の 太陽が

はぐくみたりし 駒草のはな

斎藤茂吉

この歌は、斎藤茂吉が昭和14年夏に蔵王に登山したときのものである。茂吉は明治15年に山形県金瓶村で生まれたが、14歳のとき医者を目指して、当時浅草で医院を開業していた同郷の斎藤紀一の元に寄寓する。紀一はその前に秩父で開業しており（その場所は筆者の医院のすぐ近くである）、ここで秩父郡皆野出身の青木ひさと結婚していた。彼は後にヨーロッパ留学を終えて、青山に青山脳病院を設立する。茂吉は開成中学、第一高等学校を経て東京帝国大学医科大学を卒業。そして大正3年に紀一の長女輝子と結婚し、婿養子となる。昭和2年、青山脳病院の院長を引き継いだ年には、次男・北杜夫が生まれている。このころから短歌にも打ち込むようになり、「源実朝」や「柿本人麻呂研究」を執筆している。昭和8年、ダンス教師が上流婦人と不倫を繰り広げていたとする「ダンスホール事件」が起こった。この婦人たちの中に輝子がいたとマスメディアが報じたのである。これが元で、茂吉夫婦は10年ほど別居することになった。一方茂吉は、歌会で知り合った未婚の永井ふさ子と恋仲になる。しかし、ふさ子が岡山の医者で婚約すると、茂吉は関係を断つことを余儀なくされた。コマクサの歌はその孤独の中で生まれたのである。

コマクサは高山の砂礫地に生える可憐な花である。花の形が馬（駒）の面に似ているから名付けられた。しかしひな鳥が今にも羽を広げようとする姿を彷彿とさせるので「ヒナクサ」の方が相応しいか。コマクサは小さな花であるが、根は1mにも達し、細かな葉は水滴を蓄え、苛酷な大地で生き延びている。周りに植物はなく、植物同士の争いが嫌いな孤高の花にも見える。高山植物の女王とも、高嶺の花とも称されている。北は北海道から西は木曽御嶽山まで、2000m級の山に生息する。現在は登山家でなくても、野反湖や池ノ平湿原では目にすることができる。

コマクサはケシ科の植物で、少量では麻酔作用があるため鎮痛薬として使われ、民間では胃腸薬として親しまれて来た。

コマクサを薬草として広めたのは普寛行者である。普寛さんは享保16年（1731年）、秩父郡大滝村に生まれた。始め江戸に出て剣術に励んだが、悟るところがあり、天台宗の行者となって全国を遍歴することになる。62歳のとき木曽御嶽に登り、王瀧口を開く。『埼玉県秩父郡誌』によれば、「行者御嶽の頂上に在り。一日腹痛甚だし、即ち口に般若心経を唱へ、祈願を籠め居たりしが、一羽の雷鳥忽然として飛び来り、行者を案内せんとするものゝ如し。行者其の飛び行くがまゝに従ひしが、鳥は御嶽の八合目なる田の原に至り翼をおさむ。行者其の地を検するに、岩間に美草あり、見るからにすがすがしきを覺ゆ。試に採りて之を噛めば味苦く口中自ら爽かなり。行者大に喜び之によりて腹痛全治せり。此の喜びや之を濁占するに忍びず、直に其の門弟に傳へ更に世間に傳ふ。この草の名は『こまぐさ』と云ふ。有名なる木曽御百草は之に加ふるに種々の薬用植物を以てし精製して煉薬とせしものなり」とある。今では自生のコマクサはなく、木曽御百草はキハダ一味からなっている。

ところで修験道は、古神道、仏教、道教などが複雑に入り交じった日本独自の山岳宗教である。激しい修行を行うことで悟りを開くことを目的としている。蔵王も御嶽山も修験道の霊山の一つである。修験者も岩だらけの霊山に登ったときには、このコマクサを目撃したことであろう。そして薄紅色の可憐な花に一時の安らぎを覚えたに違いない。秩父に因んだ孤高の歌人と行者が癒されたように。

（山人）

串
串
串